

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (教育学)	氏名	梅村 (千秋) 佳世
論文題目	自我体験の語りの研究 —他者性の現れという視点から—		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究では「自我体験」について、それまで素朴に一体であった私と世界の自明性が失われ、「私について問うことのできる私」が誕生する体験として捉えている。その上で、数量的調査などによって体験を対象化して客観的に定義するのではなく、体験者自身の語りの中にいかに体験が描写されるのか、そのディテールや体験の主観的・個別的側面に注目して検討することを試みた。また、自我体験の大きな特徴として、それまでの自明性を失うという分離・喪失の側面と、独立した個として誕生し、新しく世界とつながるという主体の確立の側面という両義的な性質を有すると考え、それぞれを自我体験の「へだたり」と「つながり」として検討した。さらに、自我体験において、「他者」の存在はどのように現われてくるのか考察することも試みている。</p> <p>まず第1章では、自我体験研究の歴史を概観し、自我体験が長らく心理学の研究対象となつてこなかった現状と、その背景として、主観的体験である自我体験を研究とすることの難しさについて考察した。</p> <p>続く第2章では、自我体験が体験者にとっていかなる体験であり、その生の中にもどのように位置づけられているのかについて、PAC分析を応用した半構造化面接から考察した。自我体験の多くは、長らく口にすることもできないような不安や混乱、苦しみを体験者にもたらす一方、自分の世界を広げるような体験として想起されたり、その後の人生にとって意味のあるものとしても語られたりするという、両価的側面を持つことが明らかとなった。</p> <p>第3章では、自我体験と身体の関係について考察し、自我体験がいかに身体の次元を巻き込み、生々しく体験者に訪れるものであるかが示された。また、調査事例の検討から、自我体験が「私」と「私の身体」の分裂を生み、身体の有する他者性を突きつけてくるが、分裂し対象化された身体をもう一度「私の身体」と呼ぶことで、その分裂を内包した主体が新たに誕生することが示唆された。</p> <p>第4章では、自我体験の語りの場について更に焦点を当てるため、筆者が自分の自我体験を語り、そこからの連想で被面接者が語るという面接調査を実施した。「つながり」と「へだたり」という視点から被面接者らの語りを分析し、「体験とのつながり/へだたり」、「他者・世界とのつながり/へだたり」、「調査者とのつながり/へだたり」という三種の指標を得た。いずれの指標においても、「つながり」と「へだた</p>			

り」が同時に語られるという両義的なダイナミズムが生じており、「調査者とのつながり/へだたり」では、筆者の語りに共鳴した被面接者らが、筆者の体験と一体化したような「つながり」を示すが、被面接者自身の「私の体験」を語るために、筆者の体験と「私の体験」の差異を述べ、語る側の当事者として現前する様子が明らかとなった。それは同時に、筆者が被面接者の前に、「他者」として現れた瞬間でもありと考えられた。

第5章では自我体験の語りにおける「懐かしさ」について検討し、過ぎ去った過去に対する素朴な懐かしさの場合もあれば、自我体験以前の、自他未分化な世界への郷愁——ノスタルジーと捉えられる場合もあることが示された。独立した個として生きることは、このようなノスタルジーと共に孤独を抱えることであり、そうした孤独を他者もまた抱えていると気づいた時、その孤独という「へだたり」において私と他者が「つながる」という、パラドキシカルな出会いが生じると考えられた。

終章では総合的な考察を行うと共に、心理臨床との関連から本研究で明らかになったことを振り返り、今後の自我体験研究の展望について検討した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、「自我体験」と呼ばれる体験に注目し、その特徴を明らかにしたうえで、「自分」と「世界」とのつながりとへだたりについて考察し、さらには、その心理臨床的な意義についての展望をおこなった、ユニークな研究である。

本研究においては「自我体験」について、それまで素朴に一体であった私と世界の自明性が失われ、「私について問うことのできる私」が誕生する体験として捉えている。本研究のユニークな点は、これまでの「自我体験」研究がおこなってきたような、数量的調査などによって体験を対象化して客観的に定義する方法ではなく、体験者自身の語りの中にいかに体験が描写されるのか、そのディテールや体験の主観的・個別的側面に注目して検討することを試みていることである。きわめて主観的な体験である「自我体験」を、これもまた主観的な「語り」という方法によってアプローチし、一方で、細やかな分析によってその有様を綿密に浮かび上がらせようとする本研究は、きわめて臨床的であると言えよう。

さらに、自我体験の大きな特徴として、それまでの自明性を失うという分離・喪失の側面と、独立した個として誕生し、新しく世界とつながるという主体の確立の側面という両義的な性質を有すると考えられるが、それぞれを自我体験の「へだたり」と「つながり」として検討している点も興味深い。私たちの存在は、「世界」あるいは「他者」と、へだたり、そしてつながっている。この存在の妙を、この「自我体験」という切り口でアプローチすることによって、心理臨床の基礎に存在する、「自分」という存在に光をあてたという点が高く評価された。

本論文では、自我体験研究の歴史を概観し、自我体験が長らく心理学の研究対象となつてこなかった現状を明らかにしているが、その背景として、主観的体験である自我体験を研究とすることの難しさがある。そのため、本研究では、PAC分析を応用した半構造化面接や、調査者自らが自分の体験を話すなどの工夫を用いている。その結果、これまで他者に話したことがなかった、自分の内奥にある不安や混乱、一方できわめて重要な意味を持つ体験が語られることとなった。こうした語りを引き出し、かつ、調査協力者を不安に陥れることがなかったのは、著者の臨床能力によるものと考えられる。そしてその結果として、貴重な語りを得ることができたことも評価しうるポイントであろう。

本論文ではまた、自我体験と「身体」との関係性を論じ、第5章では自我体験の語りにおける「懐かしさ」について検討している。これらの考察からは、「自我体験」が、心理的に重要な概念と深く結びついていることが示唆された。

この点に関して試問では、「自我体験」という概念のもつ、人間存在における根本的な重要性について言及がなされた。討議において、その点についてのより詳細な

考察の記述があると、なおよかったという意見や、そのことが、面接調査の方法論的独自性からも見えてきたことでもあるため、心理臨床との関連についても、より一層明快に論じることができたのではないか、という意見があった。

しかし、これらの指摘は本論文のさらなる発展を期待するものであり、その価値を下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年2月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定)当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降